

ワーケシートNo.19

製品群No. 24

貧血用薬

リスクの程度 の評価	A 著理作用	B 相互作用	C 重複な副作用のそれ べき副作用用のおそれ、それ	D 選用のお 思量するが、注意 べき副作用用のおそれ、それ	E 慢性者骨髄造血症、治療状況等) (重複な副作用用につながるおそれ)	F 効能効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 選用方法(慢性用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化
評価の視点	薬理作用	相互通用	重複な副作用のそれ	重複ではないが、注意すべき副作用用のおそれ	重複ではないが、注意すべき副作用用のおそれ	重複ではないが、注意すべき副作用用のおそれ	重複ではないが、注意すべき副作用用のおそれ	重複性特異
ビタミンB12 (コハクアミン)	メチコバーミン 500 μg	メチコバーミン 500 μg	メチコバーミン 500 μg	メチコバーミン 500 μg	メチコバーミン 500 μg	メチコバーミン 500 μg	メチコバーミン 500 μg	メチコバーミン 500 μg
メチコバーミン (コハクアミン)	メチコバーミン 500 μg	メチコバーミン 500 μg	メチコバーミン 500 μg	メチコバーミン 500 μg	メチコバーミン 500 μg	メチコバーミン 500 μg	メチコバーミン 500 μg	メチコバーミン 500 μg

貧血用薬							
リスクの評価	A 療理作用	B 相互作用	C 薫蒸ではなしが、すべき副作用のおそれ	D 運用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)	F 効能・効果(症状のおそれ)	G 運用方法(調査用のおそれ)
評価の役点	療理作用 併用禁忌(他の併用に より薬効が発生する おそれ)	療理作用 併用注意	薫蒸な副作用のおそれ 原因・毒性に特異体質ア レルギー等によるもの	薬理に基づく 運営投与 (児手により障害の 発覚・悪化のおそれ)	薬理に基づく 運営投与 (児手により障害の 発覚・悪化のおそれ)	薬理に基づく 運営投与 (児手により障害の 発覚・悪化のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化
薬	1.薬液は赤血 球の正常な 形成に影響を し、大赤血球 性貧血に対し て補正赤血 球をもたらす から、他の 薬物と競争をも たらす。 2.薬液はウラ シルのような 中間体からチ ミンをアミン 及びアミン 化合物の 生成に抑制 して作用 し、チミンはビ タミンB12によ つて後酸及 び後酸の不 可欠なデミジ ンに変化す る。一方、活性 貧血や大赤血 球の正常な 形成に対する 影響として不 可欠なデミジ ンは、薬液に 含まれる白 蛋白に附着 した初生赤 血球が部分的 に溶解停止を 起こしている。	1.薬液は赤血 球の正常な 形成に影響を し、大赤血球 性貧血に対し て補正赤血 球をもたらす から、他の 薬物と競争をも たらす。 2.薬液はウラ シルのような 中間体からチ ミンをアミン 及びアミン 化合物の 生成に抑制 して作用 し、チミンはビ タミンB12によ つて後酸及 び後酸の不 可欠なデミジ ンに変化す る。一方、活性 貧血や大赤血 球の正常な 形成に対する 影響として不 可欠なデミジ ンは、薬液に 含まれる白 蛋白に附着 した初生赤 血球が部分的 に溶解停止を 起こしている。	・薬理の立 してない薬 対しては、貧 血状態は改善 されず、特 別な改善がな い。しかし、 他の薬液によ り薬効が増 加する場合、 薬液を薬液と 併用する。	・薬理の立 してない薬 対しては、貧 血状態は改善 されず、特 別な改善がな い。しかし、 他の薬液によ り薬効が増 加する場合、 薬液を薬液と 併用する。	・薬理の立 してない薬 対しては、貧 血状態は改善 されず、特 別な改善がな い。しかし、 他の薬液によ り薬効が増 加する場合、 薬液を薬液と 併用する。	・薬理欠乏症 の予防及び治 療の需要 が増大し、食 事からの摂取 が不十分な際 (消化器 の障害、長 期投薬等) 一般に消化管 に月余金の不 全症(スリード 等)のある場合 ある場合は注 意を行つ方がよ い。	
葉酸	2.葉酸 線			・薬理に基づく 運営投与 (児手により障 害の発覚・悪 化のおそれ)	・薬理に基づく 運営投与 (児手により障 害の発覚・悪 化のおそれ)	・薬理の欠乏又 は代謝障害が認 定される際は、 特に妊娠と使 用すべきでな い。	葉酸として、通常 5～20mg/日の場合 5～40mg/日の場合 50～200mg/日、小兒1日5～ 10mg(成の場合は1～2粒、 散の場合は50～100mg)を2 ～3回に分割経口投与す る。年齢、症状により適 量を減らす。 3.吸収障 害がある場 合は注目を 行つ方がよい。

製品群No. 24

食血用薬

ワーチシートNo.19

リスクの程度 の評価	A 療理作用 B 相互作用	C' 重篤な副作用のおそれ べき副作用のおそれ	D 服用のお E 重篤な副作用の重症度、治療状況等) (重篤な副作用のおそれ)	F 物能効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(簡便用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化
評価の観点	療理作用	重篤な副作用のおそれ 重篤な副作用のおそれ を副作用のおそれ	重篤でないが、注意すべ く副作用のおそれ を副作用のおそれ	重篤でないが、注意すべ く副作用のおそれ を副作用のおそれ	重篤な効果と 重篤な副作用の どちらに上 下するおそれ を副作用のおそれ	スイッチ 化等に伴う 使用環境の変 化
評価の観点	併用禁忌(他の 併用薬との併用に より重篤な問 題が発生する おそれ)	重篤な副作用のおそれ 重篤・毒性に 基づくもの によるもの	重篤でないが、注意すべ く副作用のおそれ を副作用のおそれ	重篤でないが、注意すべ く副作用のおそれ を副作用のおそれ	重篤な効果と 重篤な副作用の どちらに上 下するおそれ を副作用のおそれ	スイッチ 化等に伴う 使用環境の変 化

貧血用薬

製品群N_o. 24ワークシートN_o. 19

リスクの程度	A 薬理作用	B 組合作用	C 重篤な副作用のおそれ	D 服用のおそれ	E 関節軟骨(膝生薬、治療状況等) (重篤な副作用ににつながるおそれ)	F 効能・効果(維持のおそれ) につながるおそれ	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 等に伴う使用環境の変化
評価の観点	薬理作用	組合作用	重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用の特徴	重篤ではないが、注意すべき副作用の特徴	通常、成人には毎回アミノ酸を1回～10mgを1日～3回経口投与する。	1.ビタミンB1欠乏症の予防として、1回～10mgを1日～3回経口投与する。 2.ビタミンB1の需要が極めて大きい場合、「ホエイ」1日1～3回経口投与する。 3.エネルギー代謝障害亢進症、妊娠期、授乳期、はげしい肉体労働時等。
ビタミンB1 (塩酸チアミン)	「ホエイ」0.1%ATP存在下にthiamine diphosphateに変換し、生理作用を現す。ビタミンB1の脱羧反応やASAサイクリルダル酸の脱羧反応に関与。トランスケトラーゼとして五酸繊り貫路での糖代謝や核代謝にも関与	「ホエイ」0.1%ATP存在下にthiamine diphosphateに変換し、生理作用を現す。ビタミンB1の脱羧反応やASAサイクリルダル酸の脱羧反応に関与。トランスケトラーゼとして五酸繊り貫路での糖代謝や核代謝にも関与	毒理特性に特異体质・アレギー等によるもの	毒理特性に特異体质・アレギー等によるもの	頻度不明(個別症)	頻度不明(個別症)	ビタミンB1の欠乏症には、代謝障害が、膜との接觸がある疾患(神經炎、筋肉痛、末梢神經炎や副神經炎)では、炎症がないのに月余にわたって発熱と倦怠感を呈す。	1.ビタミンB1欠乏症には、代謝障害が、膜との接觸がある疾患(神經炎、筋肉痛、末梢神經炎や副神經炎)では、炎症がないのに月余にわたって発熱と倦怠感を呈す。

貧血用薬

製品群No. 24

ワークシートNo. 19

評価の観点	A 薬理作用	B 相互作用	C 真菌な副作用のおそれ すべき副作用のおそれ	D 薬用のおそれ E 感染予防作用につながらぬそれ	F 無能・効果・症状の悪化 につながらぬそれ	G 使用方法(適切用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	
	薬理作用 併用禁忌(他の 薬との併用に より重大な障 害が発生する おそれ)	薬理作用 併用注意	重篤な副作用のおそれ を副作用のおそれ に基づく 禁忌・毒性によるもの	薬理・毒性に に基づく 禁忌・毒性によるもの	重篤な副作用のおそれ に基づく 禁忌・毒性によるもの	重篤な副作用のおそれ に基づく 禁忌・毒性によるもの	重篤な副作用のおそれ に基づく 禁忌・毒性によるもの	重篤な副作用のおそれ に基づく 禁忌・毒性によるもの
ビタミンB2 20mg	コラステローラル上昇抑制 作用 乳頭に脳創 孔膜に脳創 孔膜(0.9% 未満)、乳頭不 全	コラステローラル上昇抑制 作用 乳頭に脳創 孔膜に脳創 孔膜(0.9% 未満)、乳頭不 全	0.1~50%未 満(下痢、腹 痛、腹脹、 心電図、胃 部膨満)、0.9% 未満(乳頭不 全)	0.1~50%未 満(下痢、腹 痛、腹脹、 心電図、胃 部膨満)、0.9% 未満(乳頭不 全)	0.1~50%未 満(下痢、腹 痛、腹脹、 心電図、胃 部膨満)、0.9% 未満(乳頭不 全)	0.1~50%未 満(下痢、腹 痛、腹脹、 心電図、胃 部膨満)、0.9% 未満(乳頭不 全)	0.1~50%未 満(下痢、腹 痛、腹脹、 心電図、胃 部膨満)、0.9% 未満(乳頭不 全)	0.1~50%未 満(下痢、腹 痛、腹脹、 心電図、胃 部膨満)、0.9% 未満(乳頭不 全)

製品群 No. 26

鎮咳去痰薬

ワーカシート No. 20

リスクの程度 の評価	A 療理作用	B 相互作用	C 薬理作用	D 服用のおよび重複作用のおそれ (重複な副作用によるもの)	E 効能効果(症状の悪化 につながるおそれ)	F 効能効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(通常用法)おそれ)
評価の視点 確定成分	薬理作用 兼用注意 （他の併用薬間に、 特に重複的な間合 がある場合）	相互通用 （他の併用薬間に、 特に重複的な間合 がある場合）	重複な副作用のおそれ を副作用のおそれ	重複でないが、注意 を副作用のおそれ	重複投与 (争与により體重の 再発・悪化のおそれ)	重複投与の悪化 につながるおそれ それ	下記添削に伴 う咳嗽、氣管支 管炎、喘息、慢性 気管支炎、慢性 支氣管炎、慢性 鼻炎、慢性咽頭炎、 慢性扁桃炎等があ らわれることがある。 通常成人には、ベンゼン ペプシンとして1日66.5 mg(32.5mg/エイドペビ シン60～120mg相当量)を 3回に分割経口投与する。 小児には、上ベニス腺チベ シンとして日1回未満 5.64～22.1mg(5～20mg 相当量)、1歳以上3歳未満 11.1～27.7mg(10～ 25mg相当量)、3歳以上6 歳未満16.6～44.3mg(同15 ～40mg相当量)を3回に分 割経口投与する。 なお、年齢・性別により適 宜増減する。一般に高齶 者では生理機能が低下し ているので測量するなど 注意すること。
評価の視点 確定成分	薬理作用 兼用注意 （他の併用薬間に、 特に重複的な間合 がある場合）	相互通用 （他の併用薬間に、 特に重複的な間合 がある場合）	重複な副作用のおそれ を副作用のおそれ	重複でないが、注意 を副作用のおそれ	本成分に致し脳梗塞 の既往歴者、妊娠又は 授乳期である婦人 に特異性アレルギー等 によるもの	本成分の悪化 頻度不規則(0.1～5%未満 (過敏症)) 頻度：喉嚨、咽 喉、頭痛等を伴うア ナファイバー様症状)	下記添削に伴 う咳嗽、氣管支 管炎、喘息、慢性 気管支炎、慢性 支氣管炎、慢性 鼻炎、慢性咽頭炎、 慢性扁桃炎等があ らわれることがある。 通常成人には、ベンゼン ペプシンとして1日66.5 mg(32.5mg/エイドペビ シン60～120mg相当量)を 3回に分割経口投与する。 小児には、上ベニス腺チベ シンとして日1回未満 5.64～22.1mg(5～20mg 相当量)、1歳以上3歳未満 11.1～27.7mg(10～ 25mg相当量)、3歳以上6 歳未満16.6～44.3mg(同15 ～40mg相当量)を3回に分 割経口投与する。 なお、年齢・性別により適 宜増減する。一般に高齶 者では生理機能が低下し ているので測量するなど 注意すること。
評価の視点 確定成分	薬理作用 兼用注意 （他の併用薬間に、 特に重複的な間合 がある場合）	相互通用 （他の併用薬間に、 特に重複的な間合 がある場合）	重複な副作用のおそれ を副作用のおそれ	重複でないが、注意 を副作用のおそれ	本成分に致し高齶者、 妊婦又は出生体重児、 新生児、初生又は小児 に特異性アレルギー等 によるもの	本成分の悪化 頻度不明(0.1%未満 (過敏症)) 頻度：喉嚨、咽 喉、頭痛等を伴うア ナファイバー様症状)	下記添削に伴 う咳嗽、氣管支 管炎、喘息、慢性 気管支炎、慢性 支氣管炎、慢性 鼻炎、慢性咽頭炎、 慢性扁桃炎等があ らわれることがある。 通常成人には、MAO阻 害作用性のある婦人、妊 婦、出生体重児、新生 児、乳児、初生又は 小児
評価の視点 確定成分	薬理作用 兼用注意 （他の併用薬間に、 特に重複的な間合 がある場合）	相互通用 （他の併用薬間に、 特に重複的な間合 がある場合）	重複な副作用のおそれ を副作用のおそれ	重複でないが、注意 を副作用のおそれ	本成分に致し高齶者、 妊婦又は出生体重児、 新生児、初生又は小児 に特異性アレルギー等 によるもの	本成分の悪化 頻度不明(過 敏症)0.1%～ 5%未満(頑 瘡、めまい、 食欲不振、嘔 吐、便秘、腹 痛(不快)、不 眠等、口渇、 動搖等の過度 な副作用を伴う 操作の操作)	下記添削に伴 う咳嗽、氣管支 管炎、喘息、慢性 気管支炎、慢性 支氣管炎、慢性 鼻炎、慢性咽頭炎、 慢性扁桃炎等があ らわれることがある。 通常成人には、ノスカ ジンとして、通常成 人1回10～30mgを1日3 ～4回経口投与する。 お年寄り、虚弱者 では生理機能が低下 しているので測量するなど注 意すること。
評価の視点 確定成分	薬理作用 兼用注意 （他の併用薬間に、 特に重複的な間合 がある場合）	相互通用 （他の併用薬間に、 特に重複的な間合 がある場合）	重複な副作用のおそれ を副作用のおそれ	重複でないが、注意 を副作用のおそれ	本成分に致し高齶者 に特異性アレルギー等 によるもの	本成分の悪化 頻度不明(0.1%未 満) 頻度：頭痛、悪 心、食欲不 振、便秘	下記添削に伴 う咳嗽、氣管支 管炎、喘息、慢性 気管支炎、慢性 支氣管炎、慢性 鼻炎、慢性咽頭炎、 慢性扁桃炎等があ らわれることがある。 通常成人には、ノスカ ジンとして、通常成 人1回10～30mgを1日3 ～4回経口投与する。 お年寄り、虚弱者 では生理機能が低下 しているので測量するなど注 意すること。

製品群 No. 26

リスクの程度 の評価	A 素理作用	B 細作用	C 重篤な副作用のおそれ	D 有用のおそれ (重篤な副作用ににつながるおそれ)	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用ににつながるおそれ)	F 効能効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(慢性用のおそれ)
評価の場所	素理作用	細作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化
頭頸部	素理作用	細作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	I 各種呼吸器疾患 等に伴う副作用
頭頸部	リコドイン 100%「ターバー」	リソルビド 100%「ターバー」	中高齢者と化学薬剤との併用に より血栓が発生する おそれ	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	J 過敏症による過敏性 反応
頭頸部	アストミンジモ ルファン	アストミンジモ ルファン	頭頸部	頭頸部	頭頸部	頭頸部	K 胃腸炎
頭頸部	イノリゾール キノーネール	イノリゾール キノーネール	頭頸部	頭頸部	頭頸部	頭頸部	L 低血糖

去痰咳嗽鎮

製品群No. 26

卷二十一

葉密去咳真

鎮咳去痰薬

製品群 No. 26

ワークシート No.20

リスクの評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重要な副作用のおそれ	D 服用のおそれ （患者背景/既往歴/治療状況等）	E 重要な副作用のおそれ （血篭査作所に伴ながるおそれ）	F 効能・効果（症状の悪化）につながるおそれ	G 使用方法（個別用法）	H スイッチ 等による使用環境の変化
評価の観点	薬理作用	相互作用	重要な副作用のおそれ	重要な副作用のおそれ （血篭査作所によるもの）	重要な副作用のおそれ （血篭査作所によるもの）	重要な副作用のおそれ （併用により影響の重複・悪化のおそれ）	重要な副作用のおそれ （併用により影響の重複・悪化のおそれ）	重要な副作用のおそれ （併用により影響の重複・悪化のおそれ）
評価の観点	薬理作用	相互作用	重要な副作用のおそれ （併用によるもの）	重要な副作用のおそれ （併用によるもの）	重要な副作用のおそれ （併用によるもの）	重要な副作用のおそれ （併用により影響の重複・悪化のおそれ）	重要な副作用のおそれ （併用により影響の重複・悪化のおそれ）	重要な副作用のおそれ （併用により影響の重複・悪化のおそれ）

卷之四

品群No. 27

製品群N. 27

ワークシートN. 21

リスクの程度 の評価	A. 理作用 B. 相互作用	C. 重複な副作用のおそれ やべき副作用のおそれ	D. 服用のお それ	E. 聴覚障害(既往歴、治療状況等) 重複な副作用のおそれ	F. 効能・効果(使用法のおそれ) につながるおそれ	G. 使用方法(誤使用のおそれ)	H. スイッチ 化等(使う 使用環境の 変化)
					評価の視点	薬理作用 相互作用	
抗アレルギー 成分	アレルギー 反応性 成分	アレルギー 反応性 成分	併用禁忌(併用 するもの により重大な問 題が発生する おそれ)	重複ではないが、注意すべ き副作用のおそれ を併用するもの によるもの	重複ではないが、注意すべ き副作用のおそれ を併用するもの によるもの	重複ではないが、注意すべ き副作用のおそれ を併用するもの によるもの	スイッチ 化等(使う 使用環境の 変化)
清涼化成分	清涼化成分	清涼化成分	清涼化成分	重複ではないが、注意すべ き副作用のおそれ を併用するもの によるもの	重複ではないが、注意すべ き副作用のおそれ を併用するもの によるもの	重複ではないが、注意すべ き副作用のおそれ を併用するもの によるもの	スイッチ 化等(使う 使用環境の 変化)

樂用法

群書No.29

内用痔疾用業

製品群No. 29

ワークシートNo.22

リスクの程度 評価点	A 薬理作用	B 抗互作用	C' 重複な副作用のおそれ すべき副作用のおそれ	D 益用のおそれ	E 悪者背景(既往歴、治療状況等) 【重複な副作用用につかわるおそれ】	F 効能・効果(症状の悪化) につかわるおそれ	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境 変化
肝腫の視点	薬理作用	相互作用	重複な副作用のおそれ べき副作用のおそれ	重複でないが、注意すべ き副作用のおそれ べき副作用のおそれ	薬理毒性に特異性 に基づくもの によるもの	薬理毒性に特異性 に基づくもの によるもの	薬理毒性に に基づくもの によるもの	スイッチ 化等に伴う使 用環境の変 化
肛門コフレ ロール	ビタミンE・ユ ベラミン	小管系統 の腫瘍 を有しませ ぬ。血行を促進す 用を有し、血 管壁や血管張 抗性を改善す る。抗酸化作 用を有し、血 液循環の生 活性を抑制す る。内分泌系 の活性作用を 有し、内分泌 の失調を整 正する。	重複な副作用のおそれ べき副作用のおそれ	重複でないが、注意すべ き副作用のおそれ べき副作用のおそれ	重複でないが、注意すべ き副作用のおそれ べき副作用のおそれ	重複でないが、注意すべ き副作用のおそれ べき副作用のおそれ	重複でないが、注意すべ き副作用のおそれ べき副作用のおそれ	1.ビタミンE又 び治療 音(高音性)等 の変化 2.末梢循環障 害、動脈硬化 症、脂質血症 症、血栓性靜 脈症、糖尿病 症、四肢冷感 症 3.過敏化誘発 の増加防止
肛門膏 成分								

製品群No. 30

外用痔疾用薬

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 療理作用	B 総合作用	C' 重篤な副作用のおそれ べき副作用のおそれ	D 服用のおそれ (重篤な副作用につながるおそれ)	E 患者背景(既往症、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 初回効果(症状の悪化) につながるおそれ	G 使用方法(慢性用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化
評価の観点	療理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ
併用禁忌(他の 薬との併用に より重大な副 作用が発生す るおそれ)	併用注意		重篤な副作用には特異体質・ア レルギー等によるもの	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ
局所アミ妥安息香 酸エチル 麻酔成分			重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

評価の視点	A 調理作用 B 相互作用	C 置置を副作用のおそれ すべき副作用のおそれ。	D 置用のお それ E 飲用禁忌(他の 薬との併用に より重複作用 が発生する おそれ)	C 置置を副作用のおそれ すべき副作用のおそれ。		F 热敷・物理(塗抹) につながるおそれ。	G 使用方法(使い方の記述)	H スイッチ 化等に伴う使 用環境の 変化
				置置を副作用のおそれ を副作用のおそれ に注意すべ くする。	調理に基づく 置置を副作用のおそれ を副作用のおそれ に注意すべ くする。			
局所 麻酔成分	調理作用 相互作用	感覚・疼痛 表面麻醉に 係るため 使用	感覚・疼痛 表面麻醉に 係るため 使用	感覚・疼痛 表面麻醉に 係るため 使用	感覚・疼痛 表面麻醉に 係るため 使用	本剤に致し過敏症 の既往歴	置置を副作用のおそれ に注意すべ くする。	仙骨部 浸潤麻酔
局 所 麻 酔 成 分	ベルガミン法 表面麻醉に 係るため 使用	感覚・疼痛 表面麻醉に 係るため 使用	感覚・疼痛 表面麻醉に 係るため 使用	感覚・疼痛 表面麻醉に 係るため 使用	感覚・疼痛 表面麻醉に 係るため 使用	本剤に致し過敏症 の既往歴	置置を副作用のおそれ に注意すべ くする。	仙骨部 浸潤麻酔

リスクの程度 の評価	A 素理作用	B 相互作用	C 重複な副作用のおそれ	D 運用のおそれ るべき副作用のおそれ	E 効能効果・症状の悪化 につながるおそれ	F 使用方法(使用例)	G 使用方法(使用例)	H スイッチ 化等による環境 変化
評価の場所	素理作用	重複な副作用のおそれ	重複でないが、注意すべき副作用のおそれ	重複でないが、注意すべき副作用のおそれ	重複でないが、注意すべき副作用のおそれ	重複でないが、注意すべき副作用のおそれ	重複でないが、注意すべき副作用のおそれ	重複でないが、注意すべき副作用のおそれ
局所感染成分	外用痔疾用に より重大会合する おそれ)	外用注意	重複性による 重複	重複性による 重複	重複性による 重複	重複性による 重複	重複性による 重複	重複性による 重複
腫瘍プロロカイ ソニン	外用痔疾用部 であり、感覚 部位に類似のため 使用	外用痔疾用に より重大会合する おそれ)	重複性による 重複	重複性による 重複	重複性による 重複	重複性による 重複	重複性による 重複	重複性による 重複
カリカイン	カリカインのナ トリウムプロロカ イソニンに 類似のため 使用	外用痔疾用のナ トリウムプロロカ イソニンを遮断す るため 使用	重複性による 重複	重複性による 重複	重複性による 重複	重複性による 重複	重複性による 重複	重複性による 重複

外用痔疾用薬

製品群Ⅵ. 30

ワークシート№.23

リスクの程度	A 薬理作用	B 組合せ作用	C 重複な副作用のおそれ	D 運用のおそれ	E 動物骨量(胚生選、治療状況等) (重複な副作用のおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化) につかがはるおそれ)	G 運用方法(個性用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う変化	I 運用方法(個性用のおそれ)	J 運用方法(個性用のおそれ)	K 運用方法(個性用のおそれ)	L 効能が果 用される量
評価の観点	薬理作用	相互作用	重複な副作用のおそれ	効能が果 用される量								
炎症 成分	抗炎作用 : レホバーゼ酸形酸・組 織修復作用: 解剖学的分 解と排出作 用: 出血抑制作 用	無特異性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	C: 重複な副作用のおそれ : 重複性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	D: 重複な副作用のおそれ : 重複性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	E: 重複な副作用のおそれ : 重複性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	F: 重複な副作用のおそれ : 重複性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	G: 重複な副作用のおそれ : 重複性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	H: 重複な副作用のおそれ : 重複性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	I: 重複な副作用のおそれ : 重複性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	J: 重複な副作用のおそれ : 重複性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	K: 重複な副作用のおそれ : 重複性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	L: 重複な副作用のおそれ : 重複性に 特異体質ア レルギー等 によるもの
抗化ソチー ム	抗炎作用 : レホバーゼ酸形酸・組 織修復作用: 解剖学的分 解と排出作 用: 出血抑制作 用	無特異性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	無特異性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	無特異性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	無特異性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	無特異性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	無特異性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	無特異性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	無特異性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	無特異性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	無特異性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	無特異性に 特異体質ア レルギー等 によるもの
抗炎作用 : グリルレチ ン酸	抗炎のみな く鎮痛作用 : グリルレチ ン酸	無特異性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	無特異性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	無特異性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	無特異性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	無特異性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	無特異性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	無特異性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	無特異性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	無特異性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	無特異性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	無特異性に 特異体質ア レルギー等 によるもの

外用痔疾用薬

製品群群No. 30

ワケシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用 B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ D 運用のおそれ E べき副作用のおそれ F 効能効果症状の悪化 G 使用方法(使用前のぞれ) につかがるおそれ	H シンチ 化等に伴う 副作用の 変化	I 効能効果症状の悪化 につかがるおそれ	
				J 重篤な副作用のおそれ (重篤な副作用にござるおそれ)	K 重篤な副作用のおそれ (重篤な副作用にござるおそれ)
評価の視点	薬理作用	薬理作用 相性の併用 より重大な問 題が発生する おそれ)	重篤な副作用のおそれ 薬理活性に 基づくもの によるもの	薬理活性に 特異性に 基づくもの によるもの	薬理活性に 特異性に 基づくもの によるもの
評価にドロコ ルチゾン	コートリル塗 抹乳栓	アミノ酸で構成 されるホルモ ンの内膜で 代用	コートリル塗 抹乳栓 はコレステー ロイドコルチ ゾンの皮質部 としての作 用は弱く、副 腎皮質ホルモ ンに対する生 命維持作用は テコロロンの 約0.04倍で ある。	本薬の重篤 な副作用はコ ルチゾンの約 1.5倍であり、 ラット肺肉瘤 率においては コルチゾンと 同程度である。 本薬の副作用 はコレステー ロイドコルチ ゾンの皮質部 としての作 用は弱く、副 腎皮質ホルモ ンに対する生 命維持作用は テコロロンの 約0.04倍で ある。	本薬の副作用 はコレステー ロイドコルチ ゾンの皮質部 としての作 用は弱く、副 腎皮質ホルモ ンに対する生 命維持作用は テコロロンの 約0.04倍で ある。
肛炎 成分	抗炎症作用	抗炎症作用 に伴う重篤な問 題が発生する おそれ)	抗炎症作用 に伴う重篤な問 題が発生する おそれ)	抗炎症作用 に伴う重篤な問 題が発生する おそれ)	抗炎症作用 に伴う重篤な問 題が発生する おそれ)

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リシンの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 罹職な副作用のそれ に伴う副作用のそれ	D 薬用のお それ	E 痘疾部症(既往歴、治療状況等) (既職な副作用のそれ)	F 効能・物質(活性物質) につながるおそれ	G 使用方法(販売用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用量の変 更化	I 効能効果
評価の観点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のそれ を副作用のそれ	薬理毒性に特異体質ア レルギー等によるもの	重篤ではないが、注意すべ き副作用のそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のそれ	重篤な副作用のそれ に伴う副作用のそれ	重篤な副作用のそれ に伴う副作用のそれ	重篤な副作用のそれ に伴う副作用のそれ